

巻頭言

(昨年の朝鮮半島をめぐる「情勢の一変」に寄せて) …	1
北東アジアの研究最前線 ……………	3
北東アジアのフィールドから ……………	4

学会参加報告 ……………	5
NEAR Recommends ……………	8
NEAR 短信 ……………	9
NEAR センター市民研究員の活動一覧 ……………	10

昨年の朝鮮半島をめぐる「情勢の一変」に寄せて

NEAR センター副センター長
福原 裕二

本誌第49号(2016年3月発行)の巻頭言で、私は「新たな交流展開の第一歩を刻む」と題する一文を寄稿させていただいた。2015年秋にNEAR現地調査の機会を活用して実施した朝鮮民主主義人民共和国(以下、朝鮮)社会科学院との機関間対話を交流展開の第一歩として刻んだという内容であった。

その後、2016年度は、同院の歴史研究所・所長(黄明哲氏)に朝鮮の歴史学学会の研究動向と成果を紹介する内容の論文を『北東アジア研究』(第28号)に投稿してもらったほか、同年11月には平壤の同院会議室で「学術意見交換会」と銘打った学術集会を開催した。前者は朝鮮の学術活動の一端を日本へ紹介すること、後者は日本の学術活動の一端を朝鮮へ紹介することという研究「交流」を意識したのは言うまでもない。そして、2017年度は、モンゴル科学アカデミー国際関係研究所の協力を得て、モンゴル国ウランバートル市において同研究所並びに朝鮮社会科学院、人間文化研究機構(NIHU)、NEARセンターの四者共催で「北東アジア諸国間の協力可能性とモンゴル国の役割」と題する国際学術研究会議を開催した。この国際的な研究交流活動は、NIHUの北東アジア地域研究推進事業の中間評価において高い評価が与えられることとなった。

これを契機に今年度もまた、秋口に平壤で国際的な学術集会を実施する予定であった。だが、周知の通り2018年の秋口は、朝鮮の建国70周年の祝典や大韓民国(以下、韓国)の文在寅大統領の訪朝時期と重なり、朝鮮側の受け入れが困難となったため、開催は叶わなかった。しかしながら、この年にはNEARセンターの准研究員で、本学大学院の博士後期課程に在籍する崔穎麗氏が朝鮮社会科学院で受講した集中講義等の成果を活用して、博士論文を執筆し学位を取得した。このように、3年前に第一歩を踏み出した朝鮮との学術研究交流は、着実に可視的な成果を生み出しながら、二歩目、三歩目と歩みを進めている。

ところで、2018年はその朝鮮をめぐる情勢が一変した年だった。前年夏の平壤では、「一心団結／核強国／ロケット盟主国」などのプラカードを掲げ示威行進する児童・生徒たちを至るところで目にし、また地方都市の元山では、アメリカの空爆に備え、迷彩を施した車列をあちこちで見かけた。

そんな米朝間の一触即発状況を反映した状態から、2018年に入るや否や韓国で開催された冬季五輪を転機に対話局面が醸成され、4月と9月には南北首脳会談が開催され、6月には史上初の米朝首脳会談が実現したことは記憶に新しい。情勢の一変とはそうした象徴的な動向だけではない。南北・

米朝首脳会談で文書に取りまとめられたいくつかの宣言・声明などの合意が、朝鮮の核兵器開発をはじめとする「朝鮮半島問題」の解決方策の枠組みをより具体的に規定したことが実は重要である。すなわち、「対話と圧力」と言いながら「圧力」に傾斜し、国際制裁によって朝鮮の態度変更を「対話」の入り口にしようとしてきた「戦略的忍耐」の路線から、「対話と圧力」のバランスを取りつつ、「朝鮮半島の完全非核化／朝鮮半島における平和体制の構築／南北朝鮮関係における改善と発展」を相互連関の下に同時並行で進めていく「朝鮮半島の非核化」の路線へと大きく舵が切られたことである。この「朝鮮半島の非核化」路線とは言い換えれば、如何にして朝鮮の非核化を成し遂げるかということでもないし、朝鮮が完全かつ検証可能で不可逆的な形で核を無くせばそれで解決とするというものでもない。それは、朝鮮戦争の停戦状態下で継続する米韓・朝鮮間の敵対関係を、戦争



示威行進を行う高級中学校の生徒たち
(2017年8月16日 @ 平壤：筆者撮影)



迷彩用のネットを張っている乗用車
(2017年8月13日 @ 元山：筆者撮影)

の終結宣言、停戦協定の平和協定化、米朝関係の正常化、南北間での既採択の宣言と合意の履行などを通じて信頼醸成から朝鮮が認識する脅威の除去へと高めていくことで解消し、その進捗に併せて朝鮮が非核化のプロセスを段階的に進め、やがて朝鮮半島内の非核化を達成しようとする試みである。いわば朝鮮の安全保障、朝鮮半島の平和体制の構築と朝鮮の核放棄、南北関係の改善と発展のディール（取引）である。

従って、この試みの先鞭が具体的な形により米朝間で如何につけられるかが今後の方向性を決めていくことになる。未だ信頼醸成途上の米朝がより有利なディールを図るべく条件闘争を行っているのが現在の状況であろう。その実、昨年12月に私が訪朝し、社会科学院の研究者とこの問題について議論した際、先方の研究者たちはしきりに「環境と情勢が変化しつつある現況」であることを口にし、はっきりしたことは言えないと率直に語ってくれた。この話を知人の朝鮮研究者に話したところ、「それは大変面白い。実際変化する情勢の中で、対外的に主張する内容も先方（社会科学院及びこれを統御する党）では定まっていないのだろう」と分析してくれた。このように、朝鮮でも「朝鮮半島の非核化」路線へ向けた具体的な戦略・戦術は固まっておらず、その条件闘争の内容が明らかになるのは、2月下旬に予定されている第2回目の米朝首脳会談を待たなければならないだろう。

以上のように、2018年の情勢の一変を通じて形作られた「朝鮮半島の非核化」という課題は、「朝鮮の非核化」という冷戦後に生じた問題を中心に治癒しようとする対処療法的枠組みではなく、南北朝鮮の分断や朝鮮戦争の結果、その後の冷戦の展開などを経てより歴史的に生起されてきた敵対関係を解きほぐしていく作業の累積を網羅した原因療法的枠組みとなっている。敵対関係を解きほぐしていくためには、畢竟信頼醸成が求められるだろう。国家間関係の信頼醸成に研究者が貢献できることは多くないが、学術研究交流を通じた相互理解の醸成であれば、担えるに違いない。

北東アジアの研究最前線

「北東アジア地域」研究をめぐって

NEAR センター長補佐 石田 徹

NEAR センターが研究拠点の一角として参画している人間文化研究機構の「北東アジア地域研究」プロジェクトも今年度で3年目を迎えた。NEAR センター拠点（以下 NEAR 拠点）では北東アジア地域における「近代的空間の形成とその影響」をテーマに研究に取り組んでいる。今年度は、プロジェクトに関わる5拠点が一堂に会して、「北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道——」と題するシンポジウムを9月22～23日に国立民族学博物館で開催し、NEAR 拠点は2日目第2セッションを担当した。テーマは“The Start of Modernization”、報告は順に張寅性（ソウル大）（「兪吉濬の文明社会構想とスコットランド啓蒙思想」）、李暁東（本学）（「近代法理学の中国における受容と展開」）、娜荷芽（内モンゴル大）（「『満洲国』期におけるモンゴル人の日本留学について」）の3本で、司会・討論を井上厚史（本学）が務めた。プロジェクト3年目の今年度からいよいよ「近代」に突入することになった。「近代」というテーマは当然これまでに莫大な研究蓄積があるわけだが、それらを踏まえ、朝鮮（韓国）・中国・モンゴル3つの視点からそれぞれ新たな問題提起がなされた。

NEAR 拠点としては、この上記シンポの直後の9月24～27日の日程で沖縄ワークショップ：「コンタクト・ゾーンにおける『近代』」も開催した。これは本プロジェクトの研究分担者を快諾してくださった波平恒男琉球大学教授のご尽力によるものであり、この場を借りて厚く御礼申上げる次第である。ワークショップ（9月25日）では、第1部として波平恒男「沖縄近代の再考によせて」・宮城晴美（琉球大）「『被近代』下の沖縄女性の地位——風俗改良から『集

団自決』まで」の2報告と討論、第2部として筆者「対馬から考える『北東アジアの近代的空間』」、趙誠倫（済州大）「近代移行期における済州島民の移動とトランスナショナル・アイデンティティ」、バールイシェフ・エドワルド（筑波大）「オホーツク海域圏における《近代化》《被近代化》の荒波——国境変動と民族移動を切り口に」の3報告と討論が行われた。

ちなみに、楽屋話を吐露すれば、企画段階から「沖縄ははたして“北東アジア”なのか」という素朴な疑問が異口同音にいくつか出てきた。確かに、単純に「南国沖縄」が「北東アジア」なのかというのは言葉の感覚から言って当然出てこよう疑問だし、さらに翻って言えばこれまで「北東アジア」という地域概念が陸、もっと言えば大陸寄りのイメージで捉えられてきたということの表れだということも浮き彫りになる。本ワークショップは、そうした「北東アジア」概念を改めて捉え直すために、これまで NEAR センターが取り組んできた「コンタクト・ゾーン（接壤地域）」という概念を手がかりにして、「北東アジア」を考え直す試みであった。

またこれらに加えて、やや急展開ではあったものの、NEAR 拠点共催シンポとして、11月16日に名古屋大学高等研究院程永超特任助教（主催）、同大文学部池内敏教授と共にシンポジウム「16 - 19世紀東アジア国際秩序の成立と変容の研究：日本・朝鮮・中国（明清）三国比較という視点」を本学で開催した（筆者の科研も共催として参加した）。セッション1は「近世東アジア国際秩序の変動」と題して、池内敏「柳川一件の歴史的前提」、程永超「17世紀前半朝鮮経由の日明通交交渉から見る日・朝・中三国関係」、木村可奈子（日本学術振興会特別研究員 PD）「日本の琉球侵略前後の明朝の対日警戒と朝鮮」の3報告、セッション2は「中国と朝鮮そして日本」と題して、坂部晶子（名古屋大）「少数民族地域に残る記憶の地層——中国内モンゴル自治区フルンボイルから」、鈴木開（滋賀県大）「伝石之珩撰『南漢日記』と李道長撰『承政院日

記』——丙子の乱関係史料の基礎的検討」、筆者「近世対馬における日朝関係認識：『隣交』を手がかりに」の3報告、セッション3は「儒教文化圏論」と題して、姜東局（名古屋大）「『交隣の言説空間』試論」、井上厚史（本学）「朝鮮から見た東アジア儒教文化圏」、邢永鳳（山東大）「日朝交流に見られる東アジア」の3報告で、最後に総合討論を行った。1日で9報告という盛りだくさんの内容になったのは、このシンポが（北）東アジア諸国の関係を二国間関係の集積としてではなく、多国間関係の総体として捉えようとする試みの一環であり、方法的に手探りの状態にあったということが一因にあるかもしれない。だが、「グローバル・ヒストリー」が論じられる今、この方向性は「北東アジア地域」研究が進むべき道の一つであると確信している。

すでに紙幅が尽きているのだが、これではシンポの列挙で終わってしまうのもう少しだけ論じることをお許し頂きたい。筆者はNEAR拠点メンバーとしてこれまで「対馬」という視角から北東アジアを考えてきた。その中で、いくつかの気づき、ないし再確認があった。

第一に、これまで考えてきたのは北東アジアではなくあくまでも日中韓／朝からなる「東アジア」に過ぎず、「北」が欠けていたということ（もっとも、対馬という立脚

点からは元寇とポサドニック号事件（1861年）以外はなかなか「北」が見えないという要因もある）。

第二に、前述のように「北東アジア」という概念はこれまで陸地からの発想で捉えられていたということ。富山県が作成して注目を集めた「逆さ地図」（同種の地図を新潟県佐渡市も発行している）を対馬を中心に眺めてみると、東には環日本海、西には琉球弧とその対岸（強いて言えば環東シナ海）という二つの「輪」があり、対馬がその結節点になっていることに気付かされた。対馬から、さらには「海」から「北東アジア」を考えることができるのかもしれないと思ったのが沖縄ワークショップでの筆者の報告の出発点となった。

この点と関連しながら、第三に、「北東アジア」という概念は「現代的」なもの、さらに言えば極めて「人為的」なものであるということだった。単に筆者の不勉強が祟っているだけで、巡り巡ってスタート地点にたどり着いただけならば、ただただ不明を恥じるばかりである。とはいえ、もし「現代的」「人為的」なものであるならば、その「北東アジア」という概念をこれからいかに現実に活かしていくべく育てていくのかということをやより自覚的に、着実に考えていくことが肝要なのだという思いを新たにしている。

北東アジアのフィールドから

国際会議「タタールスタンと日本：相互関係の歴史と展望」

NEARセンター研究員 渡辺 圭

本年度は、「ロシアにおける日本年」ということで、日露交流が活発になった年であった。島根県立大学は、交流協定のあるウラジオストクのロシア海洋国立大学の帆船ナジェージュダ号が浜田港に寄港した

際（本年6月25～29日）、両大学の関係者や学生らの相互交流を行った。当大学のNEARセンターもまた、学術報告を目的に3名の研究員がロシア連邦タタールスタン共和国科学アカデミー・マルジャニ記念歴史学研究所との共催というかたちの、7月23日から24日にかけての国際会議「タタールスタンと日本：相互関係の歴史と展望」に参加した。ワールドカップ日本代表のベースキャンプ地ということもあるのか、会議開催地のカザンからは「清潔で治安が良い街」という印象を受けた。

会議1日目（7月23日）には、井上治研

究員と山本健三研究員が報告を行った。井上研究員の発表は「ユーラシア古代史における史料：モンゴル語による白樺手稿」というものであり、NEAR センターからの出張行程全般をサポートしてくださったラリーサ・ウスマノヴァ先生が同時通訳を担当した。ロシアにおいても修道院におけるキリスト教文献の記述が広まるまでは白樺の皮に文字を刻んでいたものであり、この報告は異文化間の共通性を考える上で貴重なものであった。山本研究員の報告は、「兵役忌避と革命：日本の外務省の公文書資料における N.I. パブロフと『大連の流刑コミューン』」と題され、日露関係史に新たな議論を呼ぶものとなった。

会議2日目（7月24日）には、渡辺研究員が「日本の亜使徒聖ニコライ（1836-1912）の宣教活動への二人の人物の影響」という報告を行った。日本に東方正教会を伝えた亜使徒聖ニコライには、宗教的な師範となった聖インノケンティ（1797-1879）と聖ニコライの翻訳事業を助けた漢学者の中井木菟麻呂（1855-1943）の影響があった。当報告では二者の果たした役割について論じた。NEAR News 第51号で豊田研究員が書かれている通り、タタールスタン共和国科学アカデミー歴史学研究所の方々には、鳥根県出雲地方の伝統的製鉄法の「たたら」が「タタール」と語源的共通性があるのではないかと、その思いがあるため、愛媛大学の村上恭通教授に依頼し、同日に「日本における製鉄の歴史：『たたら』方法」という発表をしていただいた。愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターに所属される村上教授の報告は、効果的な画像資料とともに日露双方の参加者に知的刺激を与える内容であった。

会議の終わった7月25日は、会議出席者が参加するスヴィヤズスク島へのエクスカーションが催された。同島に位置するウスペンスキー聖堂は、2017年に世界登録されており、犬の頭を持った聖人クリストフォロスのイコンが所蔵されていることで有名である。改修中のため、そのイコンを見ることは叶わなかったが、観光ガイドか

らロシア皇帝ピョートル一世（1672-1725）が犬の顔をした聖人の崇敬を嫌ってこのような凶像を禁止したという興味深いエピソードを聞いた。以上のように、短い行程ではあったが、参加者には様々な知見を得る実り多いものとなったのである。



学会参加報告

国際シンポジウム「台湾・環境・文化（專題講演 夏曼・藍波安氏）」於台湾、淡江大學日本語學院、2018年11月10日開催の報告

NEAR センター研究員 濱田 泰弘

北東アジア環境プロジェクトメンバーである福原裕二教授、沖村理史教授、豊田知世准教授、濱田の4名は2018年11月10日開催の中華民国、淡江大學外國語學院の国際シンポジウム「台湾・環境・文化（專題講演 夏曼・藍波安氏）」に参加した。主催校淡江大學からは同大學院卒業生であり台湾を代表する作家夏曼（シャマン）・藍波安（ラポガン）氏（以下、シャマン・ラポガン氏）の基調講演が行われた。開催校である淡江大學からは蔡振興教授、李文茹副教授、富田哲准教授、広島大学からは三木直大名誉教授、川口隆行准教授、韓国の高麗大学校からは金瑛根准教授が参加した。

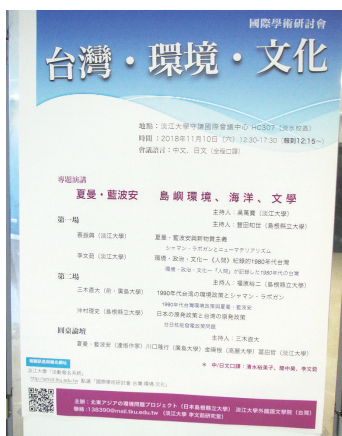


写真1：「台湾・環境・文化」
淡江大シンポジウムポスター



写真2：淡江大學キャンパス、左は会場

北東アジア環境プロジェクトは北東アジアを主領域に様々な地域、国家の環境に関わる研究者や作家等を招き共同研究を行うプロジェクトであり、今回は台湾が舞台とされた。

シンポジウムは淡江大學呉萬賽学長の冒頭の挨拶で幕が開いた。続きシャマン・ラポガン氏の基調講演が行われた。シャマン氏は台湾島嶼部、蘭嶼島の少数民族タオ族出身で淡江大學大学院博士課程においてフランス文学を専攻し、のち作家となった。シャマン氏は台北で底辺労働者として不当な扱いを受けたが、蘭嶼に戻ることでやがて少数民族タオ人の民族意識を強く自覚するに至り差別からの解放と少数民族のアイデンティティを文学活動の動機として持った。蘭嶼島には後に台湾電力の核廃棄物処理場が建設されたことから彼の文芸活動は少数民族の解放問題から反原発運動に舵を切り、さらに島嶼部を囲む海洋環境の保護運動へとつながっていった。タオ人としての民族意識の自覚は『八代湾的神話』や『冷

海情深』において体现され、「海洋文學」「環境文學」なる独自の領域を切り拓いた。彼の文芸活動はタオ人の民族意識を喚起しタオ人による反原発運動及び「土地返せ運動」に大きな影響を与えた。彼の文学的出自が自伝的に講演で語られた。



写真3：左から三木名誉教授（広島大）、本学福原教授、シャマン・ラポガン氏、金副教授（高麗大）

第一場は2名の報告者が登壇した。蔡振興（淡江大學副教授）「夏曼・藍波安與新物質主義（シャマン・ラポガンとニューマテリアリズム）」、李文茹（淡江大學副教授）の「環境・文化・政治——〈人間〉紀錄的1980年代台湾」が行われ、第二場では三木直大（広島大学名誉教授）による「1990年代台湾の環境政策とシャマン・ラポガン」が行われた。三者の目的は主にラポガン文学の位置づけと環境文学と政治とのつながりを時系列的に明らかにしようとすることにあった。台湾二大政党の一翼、リベラル系の民進党は、80年代後期の台湾民主化運動を経て90年代に環境リベラル左派が離れ緑党が96年に設立された。民進党はやがて環境問題から離れ本省人資本家に歩み寄りを見せ始め環境問題や核廃棄物処理問題から後退し始める。

ラポガン氏は保守化した民進党を批判しながら、やがて原住民文學と環境問題を文芸的に融合させる試みとして『安洛米恩之死』を著し、核廃棄物処理場問題批判を介し文芸的結晶として「エコ＝クリティシズム」を生み出した。

第二場では続いて本学沖村理史教授による「日本の原発政策と台湾の原発政策」が報告された。脱原発に向かっていた台湾と



写真4：淡江大學日本語学科学学生（左列）、右列中央に本学沖村教授、手前に本学豊田准教授

脱原発にシフトしない3.11以降の日本の原発政策の相違点を比較考察するものであった。その後、圓卓論壇としてシャマン・ラポガン氏、川口隆行（広島大准教授）、金瑛根（高麗大副教授）、富田哲（淡江大副教授）による討論が行われた。

金瑛根氏からは韓国の核廃棄物処理問題における市民セクターの役割の拡大について報告された。核廃棄物処理問題に関する「公論化委員会」の動向と専門的科学的領域に関する意思決定への公衆参加のありかたに関し重要な問題提起がなされた。

富田氏からは台湾の緑色民主主義と民進党の政治的動向についての報告があった。川口氏からは、差別と文学の関係に関する講演がなされた。特に「排除されているもの」の声を社会にどのように届けるか、排除される存在と声を可視化することに市民社会の公共圏の意義があり、またそこに文学の意義があることが指摘された。さらに核問題をめぐり高木仁三郎の尽力のように「市民と科学者の協働」の関係性が日本で見られる一方、台湾では島嶼部少数民族という条件から文学と環境の問題が問われる対照性が論じられた。沖村氏からは日本では反原発運動において市民科学者、ノンフィクション作家の連携がある一方で原発政策が産学連携によってなされ、イデオロギー対立が生じたが、台湾では社会弱者と文学の連携が見られた一方で、イデオロギー的対立にはつながらなかったという比較分析が示された。三木氏からは仏デリダ、フーコー、アルチュセール等の仏文学のラポガ

ン氏への影響と台湾の緑色民主主義について論じられた。



写真5：左、富田副教授（淡江大）、川口准教授（広島大）

このような核をめぐる環境保護運動において、海洋島嶼部の自然環境を守るために言葉を通じて語り、思いを他者につなぐことこそラポガン氏の海洋文学の意義があることが総じて確認された。ラポガン氏からはドキュメンタリー映画とは未来から過去をみつめる作業である一方、文学とは現在から未来を見つめる試行であり、若い世代の台湾の青年が未来をどのように見つめ、見つめていくべきかという討論の最後に問題提起がなされた。これは講演を聴講していた約30名の淡江大學日本語学院の若き学生にあてたメッセージでもあった。台湾の二大政党制と環境をめぐる政策の迷走、そして脱原発政策と少数民族居住区の島嶼部への核廃棄物処理場設置という歴史、そこから生まれた少数民族のアイデンティティをめぐる文学と反原発運動。さらにラポガン氏の圧倒的存在、そして海洋文学とエコクリテシズムの中に環境、文学、政治という思わぬ結びつきを知ることが出来た。ラポガン氏には静かながら秘められた「戦う人」の意思と迫力があった。

北東アジアにおける複数国家間の共通項と異質性、そして中心と周縁の問題、そして文学、環境、政治の融合性。遠くて近い国台湾での知的触発体験であった。末尾ながらシンポジウムの進行役を担当された三木先生、主賓であるラポガン氏、そして高麗大金先生はじめ通訳や運営にご尽力頂いた淡江大日本語学科の先生方、シンポジウムの運営スタッフの皆様に深く御礼申し上げたい。

NEAR Recommends

“自著を語る”

自著『現代中国の省察——「百姓」社会の視点から』（国際書院、2018）を語る

NEAR センター長 李 曉東

本書は現代中国の課題を特に「法治」と「自治」という課題に求め、歴史的な視点から原理的・構造的に問い返すとともに、現実にあるこれらの政治課題が目指すべき方向を思想史や社会学など多元的取り組みで追究しようとしたものである。

共同体とは、究極的に人々の「生」を営む場である。伝統中国の場合、それはどこまでも基層社会の「百姓」たちがおのおの「生」を営む社会であり続けてきた。このような社会は人間関係の広がりからなるネットワークとしての性格が強い。人々は血縁と、その延長としての地縁や擬似的な血縁などの関係で互いにつながっていた。

そして、このような共同体は何よりも「通」——「天地交わりて万物通ずるなり。上下交わりて其の志同じきなり」——という論理によって支えられているように思われる。このような論理は「易」の哲学伝統にその源をもつものである。

本書では、中国の政治伝統における「通」の論理について考察した。まず、伝統中国における「封建・郡県」制をめぐる議論は、その根本はいかに「上下相通ずる」ことを実現できるかという点にあった。近代になって、嚴復がモンテスキューの『法の精神』を受容した際に、法の支配に強い関心を示した一方、「三権分立」についてはあまり評価せずに、むしろ立法・行政両権が相通じ相資するものだと捉えて、なによりも責任のある政府を求めた。このような「通」を重視する政治伝統は、近代以降も受け継がれている。費孝通の「双軌政治」の議論や、現代の「協商民主」も「通」の文脈の中で捉えることができる。現代中国政治を考える際、百姓社会から発した民意を表出させ

て、それを政治に反映させるという「通」の政治システムをいかに構築し機能させることができるかはポイントとなろう。

上記の「法治」と並ぶ今一つの課題は「自治」という課題である。改革開放後に中国社会構造が大きく変化した。それに加えて、格差の拡大が社会的分断をもたらしている。これらの状況は人々の間の「つながり」の再建を強く要請している。いうまでもなく、それは本質的に「上」から作り出されるものではなく、百姓たちが自ら編み出したネットワークでなければ機能することはできない。これは中国社会が追求すべき「自治」の課題でもある。筆者は、特に中国都市部の基層社会の自治組織である「居民委員会」を中心に上げ、長年の現地調査を踏まえてその活動と役割について考察した。居民委員会は「上」からの「オオヤケの公」の出先組織である一方、「下」からの「共同・公共の公」を創出する起点の一つであり、いわば「半国家・半社会」の性格を持つ結節点であり、その役割は伝統中国社会の「郷約」・「社倉」・「善会・善堂」などの「自治」の伝統を受け継いでいる性格を有するものだった。結局、現在の中国社会で進められている「社区治理（コミュニティ・ガバナンス）」は、人々の「生」への執念をいかに「上」から管理するかという視点ではなく、どのように人々の「生」のエネルギーを整合しながらそれらを生かすか、という視点から出発して、人々の間の「つながり」の再建を通じて中国社会の活力を取り戻す、という道に進む以外に方法はないと言ってよい。

要するに、現代中国の法治の課題は、縦の「通」の制度化——民意を最大限に反映させるメカニズムの創出——を通じて「治者と被治者の同一性」を実現することであり、一方の自治の課題は、横の「通」——百姓たちの中の「つながり」の創出——を通じて、基層社会の自立を実現することである。

NEAR 短信

(2018年10月～2019年3月)

研究会活動

○ 2018 年度第 3 回 NIHU 北東アジア研究会

【日 時】

2018年10月16日(火) 13:30～16:30

【場 所】

講義研究棟 大演習室 1

【報告者・テーマ】

黄雲川 (東北師範大学大学院) 「禅宗思想の変容とその影響——禅宗の日本化を中心に」、孫喆 (東北師範大学大学院) 「『伴天連追放令』をめぐる幾つかの疑問点」、苗婧 (島根県立大学大学院) 「郭嵩燾の西洋認識と王夫之の『理勢』論」、李萌 (島根県立大学大学院) 「多文化共生社会における文化的権利の保障とエスニック・メディアの役割」、討論者：劉曉東 (東北師範大学歴史文化学院 教授、院長)、刁書仁 (東北師範大学歴史文化学院 教授)、本学教員

○ 2018 年度第 4 回 NIHU 北東アジア研究会

【日 時】

2018年11月9日(金) 13:10～15:10

【場 所】

講義研究棟 会議室 B

【報告者・テーマ】

伊東貴之(国際日本文化研究センター教授)東アジアの「近世」から中国の「近代」へ

○ 2018 年度第 5 回 NIHU 北東アジア研究会

【日 時】

2018年11月30日(金) 16:30～18:30

【場 所】

講義研究棟 会議室 A

【報告者・テーマ】

藤野真挙 (韓国東義大学日本語科) 「西周の法思想と教思想——『思慮』ある『激怒』が蠢く秩序」、播本崇史 (東洋大学国際哲学研究センター非常勤研究員) 「西周の『哲学』再考——『百一新論』と慶応年間の手記から」

○ 2018 年度第 6 回 NIHU 北東アジア研究会

【日 時】

2019年1月11日(金) 15:30～17:30

【場 所】

講義研究棟 会議室 B

【報告者・テーマ】

岡洋樹 (東北大学東北アジア研究センター教授) 「清代モンゴル史記述における近代性——「封禁政策」論をめぐって」

○ 第 52 回日韓・日朝交流史研究会

【日 時】

2019年1月18日(金) 13:10～14:40

【場 所】

講義研究棟 会議室 B

【報告者・テーマ】

金仙熙 (韓国・建国大学校アジアコンテンツ研究所研究員) 「滞在研究・コラボ講義の振り返り」、福原裕二 (NEAR 研究員) 「北朝鮮の『安全の保障』からみた非核化問題」

○ 2018 年度第 7 回 NIHU 北東アジア研究会

【日 時】

2019年1月29日(火) 15:30～17:30

【場 所】

講義研究棟 会議室 D

【報告者・テーマ】

呉光輝 (厦門大学外文学院) 「『新儒家運動』の哲学者の構想と創造——西田幾多郎、ベルクソンと関連して」

○ 第 53 回日韓・日朝交流史研究会

【日 時】

2019年2月1日(金) 16:30～18:00

【場 所】

講義研究棟 会議室 B

【報告者・テーマ】

金暎根 (韓国・高麗大学校グローバル日本研究院副教授) 「オリンピック開発学と地方創成」

NEARセンター市民研究員の活動一覧 (2018年10月～2019年3月)

○第2回市民研究員研究会の開催

【日 時】

2018年12月15日(土) 14:00～16:30

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス講義研究棟
1階中講義室3

【内 容】

開会挨拶／アカデミックサロン…李正吉
研究員「なぜ韓国大統領の政治的悲劇は
繰り返されるのか」／市民研究員による
研究報告…小林久夫氏「ハラルフード
をめぐる諸考察——イスラーム法の観点
から」／共同研究経過報告…宋佳氏(大
学院生)・田中文也氏／岡崎秀紀氏(市民
研究員)：「山陰地方の歴史文化を活用し
た中国からの誘客を事例として」(田中
氏)；「アプリ『騰訊問卷』を利用したア
ンケート調査について」(岡崎氏)；李強
氏(大学院生)・滑純雄氏(市民研究員)「韓
国における進歩と保守の対北政策」／閉
会挨拶；閉会后グループリサーチサロン

○NEARセンター市民研究員有志による 新年餅つき会の開催

【日 時】

2019年1月26日(土) 9:30～11:30

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス交流セン
ター玄関前広場および1階研修室

【内 容】

NEARセンター市民研究員有志の発議に
より、特定農業法人ひやころう波佐(浜
田市金城町波佐地区)のご協力のもと餅
つき会を行い、島根県立大学大学院生・
留学生・市民研究員・島根県立大学教職
員の交流を図りました。

○第2回市民研究員全体会の開催

【日 時】

2019年1月26日(土) 13:00～16:00

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス交流セン
ターコンベンションホール

【内 容】

開会挨拶／市民研究員による研究報告…
田中文也氏「古代史研究約10年間のまと
め」；岡崎秀紀氏「八雲と登山 プレー山・
富士山・嵩山」；若林一弘氏「日本語教育
課外活動としてのコンテスト」／臨時ア
カデミックサロン…畢世鴻雲南大学教授
「中国・ASEAN関係と一帯一路イニシア
ティブ」／閉会挨拶；閉会后グループリ
サーチサロン

○第3回市民研究員全体会の開催

【日 時】

2019年3月2日(土) 13:00～16:20

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス講義研究棟
1階 中講義室3

【内 容】

開会挨拶／大学院生と市民研究員の共同
研究成果報告…宋佳氏(大学院生)・田中
中文也氏、岡崎秀紀氏(市民研究員)「広
域観光連携による観光客誘致に関する研
究」；李強氏(大学院生)・滑純雄氏(市
民研究員)「韓国における進歩と保守の対
北政策」；金炫兌氏(大学院生)、豊島秀
明氏(市民研究員)「在日コリアンの『国
籍選択』という課題の多様性：地域比較
と世代間の視点」／閉会挨拶

NEAR News 第55号

2019年3月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near/>